

主催



協力



presents 東北、あれから 5年 メモリアル チャリティー コンサート

収益金はあしなが育英会を通して、東北大震災の遺児のために全額寄付をさせていただきます。

★ イタリア文化会館 東京 アニエッリホール

〒102-0074 東京都千代田区九段南2-1-30 Tel: 03-3264-6011

2016年3月20日(日)

17:00 開演 (16:30 開場)

チケット 4,000 円

協賛



イタリア人・日本人ミュージシャン、アーティストと共に
あの日を忘れないように・・・

音楽アドバイザー：音楽スタジオファンタスティコのエンツォ・ディ・アマリオ先生



<http://www.diapason-agency.com>

お問い合わせ diapason.italiano@gmail.com tel. 070 5542 2560

TOHOKU, 5 ANNI DOPO

Concerto di beneficenza

All'Istituto Italiano di Cultura

2016



2011

http://www.geocities.jp/angelo_de_rosa/TOKYOniGENPATSUWOdemo.html

東京に原発を！デモ

安全だから！！

9月25日（日）14:00 集合、14:30 出発

今まで多くの責任のある人達(政治家、役人、東電、大学教授、放射能の専門家)が、原発事故について、数え切れない程多くのとんでもない発言を繰り返してきました。人としての羞恥心を全く捨てているのかと思いました。非常識も甚だしい事です。

これらの発言を取すかしても無くできる彼等は、2つの理由が考えられます。単に精神が破綻しているのか、もしくは何か利害関係があるからなのか。でも私達は彼等の精神が破綻している事はないように思います。多分優秀な人達なのかもしれません。

がしかし、私達も彼等が簡単に欺けると思っている程愚かではありません。ですから、私達は彼等が繰り返した発言を皆と一緒に叫びたいと思いつきました。

このデモは反原発ではありませんが、『皮肉』を使い、今までのおかしい発言をプラカードに書き、信じたふりを行います。例えば、「放射能の影響はニコニコ笑っている人には来ません、クヨクヨしている人に来ます。」(山下俊一／福島県放射線健康リスク管理アドバイザー)「プルトニウムは飲んでも安心。」(大橋弘忠東京大学大学院教授) など。こちらのリンクを見れば面白い発言がいっぱい載っています。このリンクを見て気に入った発言を選び、参加するかたそれぞれプラカードに書いて持ってきていただきます。

http://www.geocities.jp/angelo_de_rosa/TOKYOniGENPATSUWOdemoFRASIceleabri.html

これ以上面白いコメントは思いつきませんから、新しいキャッチフレーズは考えなくていいと思います。でももし、彼らの発言ほど面白いものではないとしても、「原発は安全だから東京につくってください！」など、書いていただいてももちろんかまいません。とにかく、原発反対ではなく、原発賛成の発言だけを信じるフリをしましょう。怒りを表すのではなく、『皮肉』を使ってアピールしてみましょう。また、デモの最後に新橋駅前SL広場でみんなのスピーチや報告などをします。

【コース】 常盤橋公園(東京八重洲北口近く)集合・スタート

(地下鉄半蔵門線三越前駅から徒歩2分、大手町駅から徒歩4分、銀座線三越前駅から徒歩5分、JR東京駅から徒歩6分) 東京都千代田区大手町 2-7-2、千代田区まちづくり推進部道路公園課

↓
外堀通り(東京駅八重洲口前) → 数寄屋橋交差点 → 銀座西五丁目～六丁目～土橋交差点 → JR新橋駅
ガード下 → 新橋駅日比谷口前交差点左折 → 柳通り → 桜田公園 → JR新橋駅前SL広場
(スタートからゴールまで約一時間くらいのデモです。)

IPACS (International Parents Association for Children Safety) 企画

http://www.facebook.com/groups/199972290048717/...tel/fax 0422-20-9277...e-mail angelo_de_rosa@ybb.ne.jp

DIMOSTRAZIONE “pro” nucleare Dimostrazione per le strade di Tokyo a favore del nucleare

2011





Kichijoji, 14 May 2011

今すぐ脱原発！ Symposium

Panellists, Guests and Staff



向井雪子 (むかい・ゆきこ)
チェルノブイリ子ども基金理事。
1991～97 年までチェルノブイリ子ども基金事務局長。
2004～09 年に再度事務局長をつとめる。現在はボランティアスタッフとして、理事として、救援活動が続いている。地元(志木市)では、チェルノブイリの子どものための「カーナ」を1998 年より主宰し、年2回のサイマルバザーを開催している。チェルノブイリ子ども基金は、フォトジャーナリスト広河隆一がチェルノブイリを取材中、現地の母親たちの呼びかけを受け募金活動を始めのをきっかけに1991 年設立。医療機器、医薬品、ミルク、教材、放射線検知器、救援物資を被災地に贈る。また、日本の原発廃止のため集会やデモを他グループとともに主催し活動。
<http://www.smn.co.jp/cherno/>



小倉志郎 (おぐら・しろう)
福島第一原発の建設に際し、原子炉系の機器のエンジニアリングに携わった。原発の現場をよく知る人物の一人。「DER SPIEGEL」(ドイツ)など、海外雑誌にとりあげられ、世界に日本の原発の現状を発信する。レベルの高い放射能をため込んでいるという本質的な問題、最大の危険性をうたて、政府や電力会社が言い続けた「安全」は大間違いであると、今年3月5日、原発の危険性が子どもでもわかるよう、自ら紙芝居を作成、読み聞かしている。冊子「原発を止めて自衛戦争はできないー原発と憲法の関係ー」では、平和という条件が崩れた時、原発にはどんな問題が生じるかをわかりやすく書いている。



大沢ゆたか (おおさわ・ゆたか)
立川市議会議員(無所属)。反原発自治体議員連盟。
1976 年に障害を持つ人の介護を始め、以来、障害者問題に取り組む。その後、湾岸戦争に反対する活動やごみ問題、環境問題に関する会で活動。1998 年、立川市議会議員に初当選。議会での活動、反戦・平和運動、ホームレス支援などの市民運動を続ける。「少数者の声を市政に届けよう！」が活動の柱。福島原発事故後、静岡の議員とともに福島へ行き放射能測定。電力自由化にて、立川市の全ての小・中学校、一部の保育園、公共施設、競輪場は、原発を持っていない電力会社と契約、その結果コストダウンに。一般市民にもわかりやすい電気料金の話からも原発廃止をうたえる。
<http://homepage2.nifty.com/osawa-yutaka/>



伴英幸 (ばん・ひでゆき)
NPO 法人原子力資料情報室共同代表。1975 年、早稲田大学卒業。生活協同組合専従を経て、1989 年脱原発法制定運動事務局スタッフに。1990 年より原子力資料情報室勤務。1995 年同事務局長、1998 年共同代表。著書に『原子力政策大綱批判』、共著書に『原子力市民年鑑』ほか、原子力資料情報室パンフレットに執筆。原子力資料情報室は、原子力に依存しないエネルギーのあり方を確立するため1975 年9 月設立された。通信やパンフレットにて常に正確な情報を迅速に発信。公開研究会も開催。5月2 日、原発労働者と住民の安全、健康を守るために、厚労省、文科省、内閣総理大臣宛て要請書を他グループとともに提出。
<http://www.cnic.jp/>



明石昇二郎 (あかし・しょうじろう)
ルポライター。ルポルージュ研究所代表。
1985 年、東洋大学社会学部応用社会学専攻マスメディア専攻卒業。1987 年、『朝日ジャーナル』に芥子所村の核燃料サイクル基地計画を巡るルポを発表し、ルポライターとしてデビュー。フリーのテレビディレクターとしても活動し、1994 年、民放連盟賞受賞。ルポの対象とするテーマは、原子力発電、食品公害、著作権、過剰な金銭問題など多岐にわたる。著書に『原発崩壊』全3巻、『グーグル・真説あり！』集英社、『シミュレーション・ノンフィクション 原発震災！』七つ森書館、他多数。5月中旬発表予定の週刊朝日別冊「朝日ジャーナル」に、署名記事が掲載される予定。テーマは「原発と報道」。実態とその問題、課題を具体例を挙げながら検証。
<http://www.rupoken.jp/>



福士敬子 (ふくし・よしこ)
東京都議会議員(無所属)。反原発自治体議員連盟共同代表。1985 年、東京杉並区議会議員にトップ当選。1993 年「自由民主党」を結成。1999 年、東京都議会議員選挙初当選。政策提案の4 本柱は「老年者の子どもたちがいきいきと暮らせる福祉・教育の環境整備」「都民に見え・わかる・納得できる都政」「これ以上、東京を汚さない、壊さない」「安心して働き続けられる労働政策」。おかしいと思ったことは議会にて積極的に発言している。原発だけでなく様々な社会問題に取り組む。政変政治に翻弄されない市民の政治を実現するため、市民自治'93 を結成。他のメンバーは地域の一般の方々で、市民の意見を都に伝えようと活動。現在、都内を走る核燃料輸送車の災害対策を要請中。
<http://www.asahi-net.or.jp/~pq2y-fks/>



布施哲也 (ふせ・てつや)
反原発自治体議員連盟共同代表。
中央大学二部法学部法律学科卒業後、民間会社勤務。1991 年より青森市議会議員を4 期つとめる。狭小事件の再審を求める市民の会、障害者の教育権を実現する会などで活動。自治体問題で評論活動。著書に『官製ワーキングプア』七つ森書館、『官製貧困社会』七つ森書館、『官製クライシス』七つ森書館、など。小学生の頃から社会的関心を持つ。正しいと思ったことは実行する。布施さんに「挫折」という言葉は無い。たんぽぽ舎とはふるから交流あり。昨年8月末に反原発自治体議員連盟を計画、5月22日に正式発足。
<http://www.l.ttcn.ne.jp/~tettan/>



原田裕史 (はらだ・ひろふみ)
たんぽぽ舎講師。
筑波大学大学院修士課程修了。理工学修士。「核開発に反対する会」運営委員でもある。共著『題して核武装する日本』(核開発に反対する会・影書房)たんぽぽ舎は1989 年誕生。チェルノブイリ事故で食品汚染を心配し、放射能測定機を中心に原発廃止を目指す。毎月研究会・学習会を開き、原発現場を見学するツアーもおこなう。事務所は「みんなのひろば」として開設し、広く社会運動の集い場として、また、資料参照の場として利用できる。掲示板やピラ交換コーナーも用意。E メールアドレスを登録するだけで、原発に関するニュースを常に配信してもらえる。
<http://www.tanpoposya.net/>



阪上武 (さかがみ・たけし)
福島老朽原発を考える会代表。
東電の原発及び浜岡原発の運転停止、老朽原発の廃炉、プルサーマル中止を求めて、福島市民連帯と連携しながら首都圏で活動。浜岡原発運転停止訴訟原告。東電MOX 裁判元原告。福島老朽原発を考える会などが主催した芝公園デモには、若者からお年寄りまで幅広い年齢層の人々が常に数千人集まる。福島の子供たちが放射能から守るため、日本政府に対し、文科省が示した学校等の校舎・校庭等の「20ミリシーベルト基準」の即時撤回および被ばく量の最小化のための措置を求める要請をしている。また、この要請への署名運動も継続中。
<http://homepage3.nifty.com/fukuru-no-ka/>

Staff

Wada Shigeji, Vincenzo Coronati, Haruka Suenaga, Yamaguchi Chisako, Chokky Hitomi, Tate Motoko, Saito Hajime, Odawara Rin, Arai Masako, Caterina Yajima, Numadate Chikako, Oki Mitsuyo, Miura Naoko, Nakabayashi Haruka, Arai Kazuo, Jerry Lee Cibili'

このシンポジウムの内容と映像は、こちらのサイトにてご覧いただけます。
http://www.geocities.jp/angelo_de_rosa/

ABOLIRE SUBITO il NUCLEARE! Simposio sull'uso dell'energia nucleare in Giappone

2011



伴 英幸



『ひきこもり』

討論会

2008年10月19日 午後6時より (参加費無料・事前申込不要・皆様お誘いあわせのうえご参加下さい)『ひきこもり』に関して、たくさんの人が「親に問題がある」と答えます。しかし、果たしてそうでしょうか？今、日本のひきこもりは100万人いと言われています。このままでいいのでしょうか、皆で真剣に考える時なのではないでしょうか。ひきこもりについて、もっとたくさんの人が認識するように、偏見を無くすために、今回、下記ひきこもりエキスパートの方々とはひきこもり経験者をお招きして、ディスカッションを行います。是非、ご参加下さい。参加頂く方



寺脇研さん 二神龍基さん 北山ひと美さん *奥山雅久さん 吉田寛子さん 布施友洋さん 滝本竜彦さん スター・アルベルトさん ビオ・デミリアさん

◆ 寺脇研(てらわき けん) <http://www.f-kyoukai.com/blog01/> 1975 年文部省入省。初等中等教育局職業教育課長等を務めた後、一時広島県教育委員会教育長に。再び文部省に戻り高等教育局医学教育課長、生涯学習局生涯学習振興課長、大臣官房政策課長、文部科学省大臣官房審議官生涯学習政策担当を務める。◆ 二神龍基(ふたがみ のうき) <http://www.new-start-jp.org/> NPO 法人「ニュースタート事務局」代表。学習塾、幼稚園経営の後、世界各地の教育プロジェクトに参画。千葉県で引きこもりや不登校、ノートの若者たちの再出発を支援するニュースタート事務局を設立。現在は世界 88 ヶ所に「離居福祉村」をつくる活動に邁進している。◆ 北山ひと美(きたやまひとみ) <http://www.wako.ed.jp/e2/> 和光鶴川小学校教諭。「人間と性」教育研究協議会(性教協)の本部幹事。子どもたちが豊かな人間関係を育みながら、共に学び、生活経験を積み重ねていく教室作りを日々目指している。◆ 奥山雅久(おくやま まさひさ) <http://www.khj-h.com/index.htm> 全国引きこもり KJH 親の会代表。10 年前埼玉にて活動を始め、現在、全国規模となっている。また、厚生労働省に国の支援を求める要望書を提出。これにより昨年、「厚生労働省引きこもり関連施策推進チーム」が発足。総合施策を組む構え。(※ 都合により今回は VTR での参加となります)◆ 吉田寛子(よしだ ひろこ) NPO 法人「ニュースタート事務局」スタッフ。ひきこもり当事者の部屋を訪ね、コンタクトを取るために最初に働きかけるスタッフとしてひきこもり支援をしている。◆ 布施友洋(ふせともひろ) NPO 法人「ニュースタート事務局」スタッフ。ひきこもり経験者。現在、ひきこもり当時入居していたニュースタート事務局にて、ひきこもりの若者たちをサポートしている。◆ 滝本竜彦(たきもと たつひこ) <http://www.boiledeggs.com/chojin/takimotoinfo6.html> 小説家。ひきこもりが高じて大学を中退。「ネガティブハッピー・チェーンソーエッチ」で第五回角川学園小説大賞特別賞を受賞し、デビュー。二作目に自らのひきこもり体験をモチーフにした「NHK によこそ」がある。NHK とは日本ひきこもり協会の略。◆ ビオ・デミリア <http://giapgio.blogspot.com/> イタリアのジャーナリスト、イタリアのテレビ局・新聞・雑誌の日本特派員。◆ スター・アルベルト <http://www.geocities.jp/syomeimondai/rounei.doc> '04 年宮崎市内で起きた放火殺人事件で妻と次女を失った。終身刑の創設を求め署名活動を行っている。既存の教育制度に批判的な立場を取っている。◆ 数人の小・中学校教師。◆ 数人の日本の新聞のジャーナリスト etc.

会場 武蔵野商工会議所の市民会議室(4階) 交通 JR 中央線吉祥寺駅下車 北口 徒歩 5 分



〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町1-10-7 TEL: 0422-22-3631(代) FAX: 0422-22-3632

協力スタッフ: 伊藤奈緒子, 井上晋, 佐藤直子, 末永晴香, 鈴木麻里子, 藤素子, 中村澄子, 中村やすゆき, 沼館千佳子, 藤岡正子, 八木優子, 池田喜久江, 河地政恵, 三浦直子, 大木渙代, Caterina Yajima, Gianfranco Principalli, Luca Marchesin, Scilla Alecci, Isabella Berri.

AUTORECLUSI SOCIALI

Simposio sul fenomeno degli “hikikomori” in Giappone

2008



ロ・ステディオー・ロイタリア語文化教室主催
 入場無料・ご予約必要なし・ご興味のある方皆様の来場をお待ちしております。

生きる事を選ぶ人の理由を
 理解する為に死を選ぶ人の
 理由を理解したい。
 日本とイタリアの状態について。

自殺

真に重大な哲学上の問題をはっきりとつかない
 自殺といふことだ。人生が生きるに
 値するか否かを判断する、
 これが哲学の根本問題に
 答えることになるのである。
 それ以外のことは、それ以後の問題だ。

2013年10月20日(日)18時～吉祥寺駅武蔵野市商工会議所・カミュ
 参加して下さるパネリストの皆様



川田 龍平
 (かわた りゅうへい)
<http://ryueikawada.jp/>
 参議院議員。みんなの
 党所属。生後6ヶ月で血友
 病と診断され治療のための
 輸入血液製剤投与によ
 りHIV感染。
 1993年「薬害エイズ事件」
 の国と製薬会社の責任を問
 う東京HIV訴訟の原告に加
 わり、1995年実名を公表。
 1996年に和解。それ以後も
 薬害エイズの真相と責任を
 追及し続ける。
 2007年の参議院選挙に立
 候補し当選。自分の経験か
 らいのかを最優先にする
 社会「生きることを喜べる
 社会」を実現するため、命
 の問題に取り組む。



中原のり子
 (なかにらのりこ)
<http://www.5f.biglobe.ne.jp/~nakahara/>
 1999年、小児科医だった夫
 の中原利郎さんが勤務先
 病院で過労自殺。2007年
 労災認定されるが病院側の
 責任は地味・高裁とも認め
 ず、最高裁に上告受理申立
 をする。最高裁は「我が国
 におけるより良い医療を實
 現するとの観点から」双方
 に和解を勧告。2010年和解
 成立。2010年の医療の改善、
 医療で働く医療従事者、患
 者さんたち、働く人たちに共
 通する命の問題改善を訴え
 ている。東京過労死を考え
 る家族の会代表。
<http://www.stopkaroshi.net/index.html>



清水 康之
 (しみず やすゆき)
<http://www.lifeink.or.jp/hp/top.html>
 NPO法人 自殺対策支援セ
 ンター ライフリンク代表。
 元NHK報道番組ディレクタ
 ー。自殺遺児たちの番組を
 制作したことがきっかけで、
 自殺対策の重要性を認識
 する。NHKを退職し、2004年
 にライフリンクを設立。代表
 就任。署名運動や国会議員
 への働きかけによって「
 自殺対策基本法」成立に貢
 献するなど、自殺対策の「
 つなぎ役」として日々全国
 を奔走する。



伊藤 敬雄
 (いとう けいこう)
<http://www.kodaira-clinic.jp/index.html>
 精神科医、小平駅前クリ
 ニック、日本医科大学精
 神神経科講師。救命救急
 センター内の精神科医と
 して自殺未遂患者と毎日
 救急病棟で接した経験と
 経験と、退院後も外来患者
 として接している経験とを
 踏まえ、自殺問題、自殺
 未遂患者支援に必要な
 サポートに取り組んでいる
 等。講演会やシンポジウ
 ムなど啓発活動に力を注
 ぐ。



前田 有全
 (まえだ ゆうぜん)
 自殺・自殺に向き合う
 僧侶の会
 (http://www.bouzsanga.org/)
 正山寺住持。宗源を超え
 た僧侶有志の「自殺・自殺
 に向き合う僧侶の会」共同
 代表。手紙相談、自殺者
 追悼法要、自殺遺族の分
 かち合いの集いなど、自
 死(自殺)対策に取り組む
 ことで「一人ひとりが生き
 生きと暮らし、安心して暮
 ることのできる社会」を目
 指し、働きかけ中。財
 団法人メンタルケア協会
 精神科士。



本会場でイタリアアーティストの
 ヴィンチェンツォ・コナーティ氏の自殺をテ
 ーマとした作品を展示します。
 東京在住 フォトグラファー2011年より、低
 画質の写真シリーズ「空、花、植物、果物」
 、そして東京を舞台に人々や建物を日々撮り
 続けている。その数約10000点にのぼる。
<http://www.ideaveloce.com>

ご協力者



法人ニュースタート

<http://www.new-start-jp.org/>
 事務局 中本英彦さん
 「家族をむく」を活動理念に、
 ニート・ひきこもりの若者の
 再出発を支援する機関スタッフの
 中本英彦さんにご協力いただきました。



会場
 東京都武蔵野市吉祥寺本町1-10-7 武蔵野市
 立武蔵野商工会館6階 交通:JR中央線吉祥寺駅下車
 北口 徒歩5分
 主催・お問合せ
 "LO STUDIOLO" / イタリア語文化教室 Angelo De Rosa
 Tel/fax 0422-20-9277 cel. 070-5542-2560
 e-mail angelo_de_rosa@ybb.ne.jp
http://www.geocities.jp/angelo_de_rosa/

SUICIDI

Simposio sul fenomeno dei suicidi in Giappone

2013

Capire le ragioni
 di coloro che
 scelgono la morte
 per capire le ragioni
 di coloro che
 scelgono la vita.
 La situazione
 in Giappone e in Italia.

Domenica 20 ottobre 2013 dalle ore 18 a Kichijoji
 Hanno gentilmente accettato il nostro invito i seguenti esperti



KAWADA RYUEI
<http://ryueikawada.jp/>
 Senatore dal 2007.
 All'età 10 anni a causa di un
 errore durante una trasfusione
 di sangue contr' l'AIDS.
 Sopravvissuto con coraggio gli anni
 dell'adolescenza col peso della
 consapevolezza di una morte
 imminente, si impegna
 attivamente nella difesa dei
 diritti umani, per
 il miglioramento del sistema
 di welfare in Giappone e per
 la diffusione del rispetto e
 dell'amore per la vita. Oggi, a
 37 anni, è uno dei politici
 maggiormente attivi per la
 risoluzione di questioni che
 mettono in pericolo la vita dei
 cittadini, fra cui ovviamente
 il suicidio.



NAKAHARA NORIKO
<http://www.5f.biglobe.ne.jp/~nakahara/>
 Moglie di una vittima del
 suicidio per karoshi.
 Nel 1999, il marito, medico
 pediatrico, decide di togliersi
 la vita non sopportando lo
 stress da superlavoro di cu
 ero vittima. Da allora, per
 evitare che altre persone
 debbano vivere lo stesso
 dramma, questa coraggiosa e
 determinata donna
 è impegnata in una lunga
 battaglia. La figlia, che
 quando il padre morì aveva
 solo pochi anni,
 ha deciso di svolgere la
 stessa professione del padre.
<http://www.stopkaroshi.net/index.html>



SHIMIZU YASUYUKI
<http://www.lifeink.or.jp/hp/top.html>
 Durante le riprese di un
 documentario per la NHK
 che trattava del suicidio,
 decide di cambiare la sua
 vita. Lascia il lavoro di
 operatore televisivo e fonda
 il Centro studi e ricerche
 LIFE LINK. Lo scopo del Centro
 (NPO) è attraverso l'analisi e
 delle statistiche e la stretta
 collaborazione con le istituzioni
 pubbliche, trovare dei rimedi
 per diminuire l'alto numero
 di suicidi che da molti anni si
 registra regolarmente
 in Giappone. Le pubblicazioni
 del dottor Shimizu sono testi di
 riferimento fondamentali.



ITO TAKAO
<http://www.kodaira-clinic.jp/index.html>
 Professore universitario.
 Psichiatra specializzato nei
 disturbi in eredità. Offre inoltre
 i suoi servizi nel reparto
 psichiatrico di una
 prestigiosa clinica dove
 molto spesso si "conferma"
 a coloro che hanno tentato di
 suicidarsi.
 Ha inoltre accumulato una
 vasta e preziosa esperienza
 durante gli anni in cui ha
 lavorato nei reparti che
 ospitano i malati terminali.
 Relatore molto richiesto
 ai convegni e simposi che
 trattano di questioni relative
 al suicidio.



MAEDA YUUSEN
<http://www.bouzsanga.org/Rappresentante-della-societazione-Jishu-Jikatsu-ni-mukau-Souryou-non-ka/>
 "Souryou non ka", che ha lo scopo
 di offrire aiuto, attraverso
 vari canali (consulenze, incontri
 diretti, scambi epistolari etc.), sia
 ai familiari dei suicidi sia ai
 potenziali suicidi sia a coloro che
 hanno difficoltà d'insediamento nel
 sociale. L'aspirazione
 dell'Associazione è la creazione
 di una società in cui ognuno
 abbia la possibilità di vivere
 serenamente in modo da poter
 affrontare qualsiasi problema
 senza pensare che il suicidio sia
 l'unica soluzione possibile.



Nella sala del simposio si terrà una
 mostra di alcune opere ispirate al
 tema del suicidio dell'artista italiano
 VINCENTO CORBELLI
 Dopo aver svolto l'attività di
 fotografo artistico e giornalista
 in Italia fino al 2011, è ora residente
 a Tokyo dove l'interesse e
 la sensibilità nei confronti
 dei problemi sociali lo ha portato
 spesso a far considerare
 l'impegno di attivista
 con la produzione artistica.
<http://www.ideaveloce.com>



Il Simposio si terrà presso una sala al quarto piano
 dell'edificio della Camera di Commercio di Musashino: Shi
 Musashino Shoko Kaigisho 180-0004 Kichijoji Honcho
 Musashino Shoko 1-10-7 Tokyo Tel. 0422-22-3631

con la gentile collaborazione di



Associazione NEW START
<http://www.new-start-jp.org/>
 Rappresentante:
 NAKAMOTO HIDEHIKO
 Associazione che ha lo scopo
 di offrire aiuto ai giovani giapponesi
 "risolutori" e far trovare loro
 gli stimoli e l'entusiasmo per
 ricominciare a vivere serenamente.

per contatti

Centro Culturale Italiano "LO STUDIOLO"
 Dr. Angelo De Rosa
 Tel/fax 0422-20-9277
 cel. 070-5542-2560
 e-mail angelo_de_rosa@ybb.ne.jp
http://www.geocities.jp/angelo_de_rosa/



Simposio sul KAROSHII

“Lavorare per vivere
Lavorare per morire”

INGRESSO LIBERO (dalle ore 13:00)

Con il termine “KAROSHII”, in Giappone, e' chiamata la morte per eccesso di lavoro. Letteralmente significa “morte per sovraccarico”. In genere, la causa del decesso e' un attacco cardiaco che colpisce soprattutto lavoratori di sesso maschile ed appartenenti alla fascia d'eta' compresa tra i trenta ed i cinquant'anni. Recentemente, anche molti suicidi sono stati connessi allo stress da “superlavoro”. E' difficile quantificare il fenomeno, ma gli esperti parlano di cifre molto preoccupanti. Sebbene il Karoshi, in Giappone, non sia un problema nuovissimo (il primo delle migliaia di casi accertati risalirebbe alla fine degli anni sessanta), i provvedimenti per avviarne una risoluzione sembrano ancora lontani o insufficienti. Per farci comprenderne meglio la gravita', la portata e le cause, hanno gentilmente accettato il nostro invito alcuni dei maggiori esperti in materia. Nell'occasione, sara' tentato anche il confronto con la differente visione e filosofia del lavoro esistente in Italia.

Professor **Uehata Tetsunojo**. Coniatore del termine “karoshi”, fondatore del Consultorio per contrastare il karoshi ed autore di numerosi saggi sul tema.

Avvocato **Okamura Chikanobu**. Uno dei primi a riportare una vittoria nell'ambito di una causa intentata contro una ditta in cui si erano verificate delle morti per sovraccarico. Responsabile dell'Associazione di giuristi che lavorano per aiutare le famiglie delle vittime del karoshi.

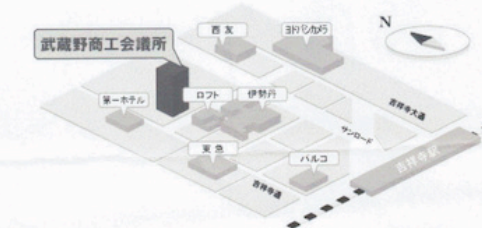
Dottoressa **Mabuchi Ikuko**, fondatrice dell'Associazione Nazionale “Karoshi Kazuko Kai”, formato dai familiari delle vittime del Karoshi. A suo marito fu riconosciuta la morte per sovraccarico nel 1988 (fu uno dei primi casi).

Dottoressa **Nakahara Noriko**. Dopo la morte per sovraccarico del suo marito che lavorava come pediatra in un ospedale (i medici sono una categoria particolarmente a rischio di karoshi), non ha mai smesso di lottare per contrastare l'aumento preoccupante delle morti per eccesso di lavoro.

Regista **Tsuechi Tokachi**. Nel 2008 ha impressionato molto la sua ultima opera cinematografica dal titolo “futsu no shigoto ga shitaru” (vorrei avere un lavoro normale). Un documento basato su una storia incredibile, ma vera. Durante il nostro simposium avremo modo di visionarne le parti salienti e l'intervista che ci ha gentilmente concesso di recente.

Giornalista **Pio d'Emilia**. Uno dei massimi conoscitori della societa' giapponese. Sulle condizioni del lavoro in Giappone ha realizzato numerosi articoli e servizi.

会場 武蔵野商工会議所の市民会議室(4階) 交通 JR中央線吉祥寺駅下車 北口徒歩5分



〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 1-10-7 TEL: 0422-22-3631 (代)
FAX: 0422-22-3632

Staff: Sawa Y., Nomadate C., Inoue S., Fujisaki M., Yajima C., Ileri I., Suzuki M., Nakamura S., Nakamura Y., Taito M.

討論会 過労死 について

2009年9月5日(土)午後 1:30 より(1:00 開場)
参加費無料・事前申込不要・皆様お誘いあわせのうえご参加下さい
世界中で過労死が1番多い日本。命の価値とは？仕事の意味とは？今、考え直す時ではないでしょうか。過労死はみんなの問題です。“過労死”命名者、研究者、弁護士、遺族らを迎え、意見交換しみんなで考えましょう。

パネリストとご協力者



◆上原鉄之丞(ウエハタテツノジョウ)

過労死の命名者 <http://www.karoshi.jp/> 過労死・自死相談センター代表。杏林大学医学部衛生学教室助教授、国立公衆衛生院疫学部成人病室長、同院院長、聖徳大学教授を経て、2005 年に過労死・自死相談センターを設立。医師として過労死・過労自死問題に取り組む。過労死の学際的研究者として「過労死」の命名者でもある。著書に「過労死サバイバル」過労死の研究「過労死のたたかひ」など多数。

◆岡村寛宣(オカムラチカノブ)

過労死に取り組む弁護士 <http://karoshi.jp/index.html> 弁護士。日本労働弁護団副会長、自由法曹団員、日本労働法学会会員、日本労働弁護団労災研究会代表、ストレス疾患労災研究会代表世話人、過労死弁護団全国連絡会議代表幹事、東京過労死弁護団代表、働く者のいのちと健康を守る全国センター副理事長、労災職業病問題に取り組む。著書に「過労死・過労自殺被害の理論と実務」『労働増進する過労自殺』『労災補償・賠償の理論と実務』など多数。

◆馬渡郁子(マワツキコ) / Ikuko M. Canlas

過労死を考える家族の会結成者 <http://www17.ocn.ne.jp/~karositik/kazukukai.001.htm> 1988 年、海事鑑定人だった夫の Quintin K.Canlas さんが虚血性心疾患で過労死。1990 年認定を勝ち取る。同年に東京過労死を考える家族の会、1991 年に全国過労死を考える家族の会を結成。同時に全国家族の会編で「日本は幸福か」出版。1997 年、全国家族の会編「死ぬほど大切な仕事ってなんですか」出版。1996 年労災救済等支援費不支給取消訴訟、東京地裁提訴。2003 年当訴訟が行政処分相当するとい最高裁審判判決後、次の2点を厚労省交渉により獲得2008 年就労支援費は適宜支給に改定、また通信大学生にも就労支援費支給拡大。現在も過労死認定・裁判闘争、遺族の相談・支援活動に取り組む。

◆中原のり子(ナカハラノリコ)

医療現場の命の問題改善の活動 <http://www5f.biglobe.ne.jp/~nakahara/index.html> 1999 年、小児科医だった夫の中原利郎さんが勤務先病院から投身自殺。2007 年労災認定されるが、病院側の安全配慮義務違反等を東京高裁は認めず賠償責任を否定。これに対し高裁判決の見直しを求め、2008 年最高裁に上告受理し立てを行った。日本の医療の改善、医療で働く医療従事者、患者さんたち、働く人たちに共通する命の問題改善を訴えている。

◆ピオ・デミリア(イタリアのジャーナリスト) <http://giornista.blogspot.com/> イタリアのテレビ局・新聞・雑誌の日本特派員。日本の社会に精通している。労働問題について強い関心を持ち、数多く取り上げている。

◆土間トカチ(ツメチトカチ) <http://tokachi.hggm.jp/>

<http://www.hb.dion.ne.jp/~tokachi/> 1971 年東京都生まれ。龍谷大学法学部卒。新聞配達員、書店員、工場員、日雇い労働者を経て 99 年より映像制作を始める。現在、映像グループ ローボジョン所属。主な作品『ネオンホール／マーガレット・ブローヌ』(04 年)、『たのしみわがらが楽生院』(06 年)、『フツウの仕事がしたい』(08 年)、川崎市在住。昨年、リアル「働き方」を扱った衝撃的な労働問題を扱ったドキュメンタリー映画「フツウの仕事がしたい」。当日会場にてこの映画の一部と土屋監督のインタビューをご覧いただけます。



MORTE da SUPERLAVORO

Simposio sulle morti da superlavoro (karoshi)

In Giappone

2009



死刑制度についての討論会

34年間もの間、無実の罪で死刑囚として獄中で過ごした免田栄氏を迎えて。

日時 2007年6月10日 午後6時より

イタリアでは現在死刑という制度はありません。イタリアだけではなく全てのヨーロッパにおいて死刑は行われておりません。例えばアフリカでも多くの国ですでに死刑制度は廃止されています。しかしアジア、アメリカではまた死刑は行われており、この先も廃止される見込みは少なく思えます。この違いは何なのかをはっきり理解するためにも、今回はこのテーマでの討論会を企画しました。今回はこのテーマについて生徒達がイタリア語でスピーチしてくれます。(全てのスピーチの日本語訳も用意致しますので、イタリア語のできない方もお気軽にお出でください) 更に、ゲストとして日本で初めての死刑囚の再審、無罪判決、そして釈放。かけがえのない34年6ヶ月という歳月をこのような経過から、刑務所で過ごさざるを得なかった免田栄さんが遠く熊本から来てくださる事になりました。スピーチ、免田栄さんのお話、そして質疑応答と予定しています。お友達もお誘いあわせの上お気軽にお越しください。



免田栄さん



島谷直子さん



門間幸枝さん



ビオディミッテさん

免田栄さん 34年間の獄中生活を経て再審無罪を勝ち取り自由の身となった。
島谷直子さん 「死刑廃止国際条約の批准を求める フォーラム'90」メンバー。
門間幸枝さん 無実の死刑囚・元プロボクサー・梅田巖さんを救う会副代表。梅田さんは41年間も拘留所に閉じ込められたまま無実を訴えている。
ビオディミッテさん ジャーナリスト。イタリアのテレビ局・新聞・雑誌の日本特派員。長年に渡って死刑制度にも異議を唱えてきた。



武蔵野商工会議所の市民会議室 (4階) 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町1-10-7
交通: JR中央線吉祥寺駅下車 北口 徒歩5分 TEL: 0422-22-3631 (代) FAX: 0422-22-3632

PENA di MORTE Dibattito sulla pena di morte in Giappone

2007



第2回 死刑制度についての討論会

2008年3月2日 午後6時より (参加費無料・事前申込不要)

現在、世界中で死刑についての議論が盛んに行われています。このまま続けていいのか廃止すべきなのか。世界の認識として、日本ではあまり議論も行われる事なく国民もあまり疑問を持たず、死刑制度の継続を望んでいるように思われているようです。今回、立場は異なりながら死刑制度の問題に関心をお持ちの皆様をお迎えして更に議論を深めていきたいと思っています。各方々からお話を聞いて、その後ディスカッションの時間を多くとる予定です。下記が参加発言者の皆様です。



タベト 翔太さん



免田 栄さん



亀井 静香さん



熊本 典道さん



保坂 展人さん



森内 也さん



タベト 翔太大司教



山花 郁夫さん



島谷 直子さん

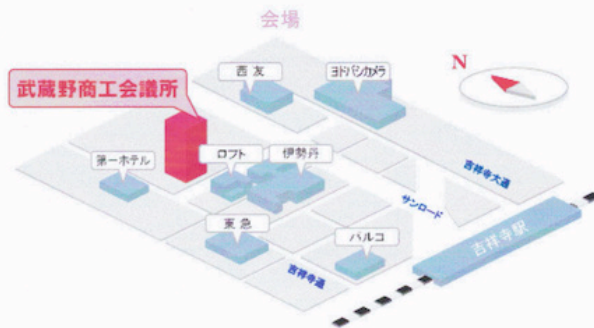


門間 幸枝さん



ビョド テツさん

タベト 翔太さん '04 年宮崎市で起きた放火殺人事件で妻と次女を失った。終身刑の創設を求め署名活動を続けている。 免田 栄さん 34 年間の獄中生活を経て再審無罪を勝ち取り自由の身となった。 亀井 静香さん 国民新党代表代行、衆議院議員、死刑廃止を推進する議員連盟会長。 熊本 典道さん「持田事件」で死刑が確定した持田蔵死刑囚の一番を担当した元裁判官。'07 年 2 月、公判当時から持田さんは無罪だと思っていたが合議のため死刑判決を書かざるを得なかったと告白した。 保坂 展人さん 社会民主党副幹事長、衆議院議員、死刑廃止を推進する議員連盟事務局長。 森内 也さん 映画監督・テレビディレクター・作家。2008 年 1 年「死刑」(朝日出版社)という大変興味深い本を書かれました。タベト 翔太大司教 元上智大学学長。教育家として、また宗教家として、常に世界の中の日本を見続けてきた。 山花 郁夫さん 民主党前衆議院議員、東京都第 22 区(調布・三鷹・狛江・稲城市)総支部長。 島谷 直子さん「死刑廃止国際条約の批准を求めるフォーラム'90」メンバー。 門間 幸枝さん 無実の死刑囚・元プロボクサー持田蔵さんを救う会副代表。持田さんは 41 年間に拘留所に閉じ込められたまま無実を訴えている。 ビョド テツさん ジャーナリスト。イタリアのテレビ局・新聞・雑誌の日本特派員。長年に渡って死刑制度にも異議を唱えてきた。



武蔵野商工会議所の市民会議室 (4 階) 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 1-10-7

交通: JR 中央線吉祥寺駅下車 北口 徒歩 5 分 TEL: 0422-22-3631 (代) FAX: 0422-22-3632

協力スタッフ: ロ・ストゥディオの生徒達、Walter Colombo, Caterina Yajima 運営スタッフ: 沼田千佳子、藤岡正子、井上晋、星野佳代、中村優子

PENA di MORTE (vol.2) Dibattito sulla pena di morte in Giappone

2008

